

正さに耐なるの時某旗亭の女將靜かに席に來りて先生に揖す先生一瞥其丸鬚姿なるを以て太田先生の室と誤認し低頭平身應酬懇懃を極む満座之を見て失笑し爾來先生を稱して「最敬禮」といふ。

無愛想先生

栃木縣師範學校校長安達常正先生風采野老の如く、虛無恬淡辭令に嫻はず、曾て同縣の縣會議員等先生を校長室に訪ふ先生一瞥知らざる者の如く、平然卓に倚り

てペンを走らし、既にして突如問ふて曰く、何用で御出になりましたと、議員等其無愛想に驚き、倉皇辭し去る。

チオニソス

東京高等商業學校備教師ヘヤ一先生齡既に耳順を越え、頭髮悉く脱落して、光明焮灼見る者をして目眩せしむ、然れども元氣旺盛、常に教員室の一隅にウキスキ、プランデー等を貯藏し、休憩時間に必ず一杯を傾けて講壇に登る、學生等先生の常に酒氣紛々たるを見乃

ち奉るにデオニンス(希臘の酒神)の尊號を以てす。

自繩自縛

醫學博士緒方十右衛門先生、大阪病院に在り、曾て戯れに部下と謀り、相約して曰く、若し婦女子より信書を送らるゝ者あらば、一通三十錢の罰金を徴すべしと、然るに幾許ならず、一葉の端書先生の許に達す、部下試みに其發信者を検すれば、先生の養成せる看護婦五名なり、此に於て一名一通と見做し、法によりて一圓五十錢

の罰金を徴す、先生之に服せず、百方抗辯せるも、審理の結果、遂に敗訴となる。

圓顔の一怪物

工學博士原龍太先生、曾て一旗亭に飲み泥酔して亭を出づ、車夫あり、走り來りて先生に車を勸む、忽ち見る、圓顔の一怪物、先生の股間に出沒して、蛇將さに穴を出でんとするの狀あるを、車夫膽を潰し、倉皇逃げ去る。

賞與分與の靈驗

農學士齋藤萬吉先生邊幅を修めず常に七ツ下りの洋服を着けて農商務省に出勤す使丁等初め先生の風采甚だ昂らざるを以て陰かに之を侮る然れども先生寡慾にして自ら奉ずること甚だ薄く年末の賞與金の如き悉く之を使丁等に分與して惜まらず使丁等大に驚き之より先生を呼んで神様といひ尊信一方ならず先生の同僚之を見て賞與金の靈驗顯著なるに驚く。

羅漢さま

文學博士村上專精先生學徳共に高く面貌廢寺の羅漢の如し一日先生釋尊降誕會の演說會に臨み非有非空の妙道を説く偶ま傍聽席に一婆子あり演說終るや突如として隣席の一青年に問ふて曰くアノ羅漢様の様なお方はナンと仰つしやいますと青年答へて曰く羅漢様は之れ當代の馬鳴前の文科大學講師今の東洋女學校長文學博士村上專精先生なりと婆子解せず南

無阿彌陀佛々々々々々々と念佛して去る。

戀 路 の 邪 魔

文學士藤岡繼平先生前年初めて令室を迎へ愛重尋常ならず比翼連理分時と雖も其傍らを去るを悲む偶ま都下に大行列あり先生乃ち令室を携へて真世橋畔に至れば先生に國史を學ぶ者五六突如として傍らに來りて曰く御一緒しましたやうと先生拒む能はず愁然として歩々令室を顧み其間次第に遠ざかるを見て

哀悼愁傷恰かも父母の喪に居るが如し學生等陰かに策の成れるを喜ぶ。

良妻撰定の標準

東京女子高等師範學校教授井口あぐり子先生率直快活にして思ふ處腹中に藏せず曾て男子の一集會に臨み滔々妻を撰ぶの標準を説いて曰く詰まる處妾の様なものイヤ妾に近いものを御撰定になれば間違ながらうと存じますと髯連恐縮し相顧みて一語無し。

足健めで名聲籍甚

廣島高等師範學校教授文學士小林郁先生講義の不得要領を以て學生等に敬遠せらる然れども名聲籍甚仕待の車夫と雖も尙ほ先生の名を記せざる者なし客あり怪みて其故を問ふ車夫笑つて答へて曰く毎日犬殺しの持つやうなステッキを振廻して歩くからソレで善く知つてゐるのですと客啞然たり。

勉強するのは馬鹿

前の文部大臣尾崎行雄先生會て北海道に遊び國館中學に臨みて演説して曰く中學時代は出来る丈け身體を鍛へねばならぬ試験のために勉強するのは馬鹿の骨頂であるとして學生等大に喜び之より専らノラクラ道を修行す父兄等之を見て陰かに先生を怨む。

稻荷の祟り

衆議院議員福井三郎先生曾て職を遞信省に奉じ、月俸四十圓を給せらる。一日横濱市の有志事を以て同省に出頭す。上司乃ち先生をして出でて面せしむ。有志素より先生を知らず。思へらく官位高き者に非ざれば事を謀るも益なしと。由て憚々焉先生に問ふに其官位を以てす。先生怫然之に告げて曰く。若し位高き者を求むれば省の裏に稻荷大明神あり。大臣より位高き事數等諸君宜しく之に就きて事を謀るべしと。既にして此事省内の問題となり。先生横濱市民を侮辱せりといふ。

の故を以て直に罰俸に處せらる。世之を傳へ聞きて稻荷の祟りといふ。

三十年間存命

衆議院議員福本誠先生、日南と號し、文名夙に一世に鳴る。曾て征清の役に從はんとし、履歷書を陸軍省に差出して曰く、勤無く功無く爵無く位なし。三十年間繼續生き居り申候也と。省吏見て苦笑す。

高襟蓄薇通

衆議院議員竹越與三郎先生蓄薇を愛し、遠く珍種を海外に求めて其庭園に植え、平生天下第一の蓄薇通を以て自任す、一豪駄師之を聞き、一日先生の邸に至りて之を見る、安んぞ知らん、先生の見て以て絶品とする處多くは之れ傳來日既に久しき者にして、唯先生洋名を知るも和名を知らざるが故に、得々之を誇るならんとは、豪駄師笑ひを忍びて辭し去る。

幕無し講釋

貴族院議員森山茂先生鳳羽と號し、盲滅法の俳諧を以て顯る、客あり、俗用ありて三たび先生を訪ふ、先生事に托して一たびも面せず、客乃ち一計を案じ、懇慫に取次に問ふて曰く、幸に大先生に面して俳諧談を聞くを得べきかと、先生聞いて大に喜び、直ちに之を客室に迎えて滔々幕無しの講釋をなす、客之がために用を辨する能はず、恐惶頓首して辭し去る。

盲の工事監督

高木正年先生、前年病のため、明を失し、同僚と共に品川土木工事の監督に當る。世多くは思へらく、盲の工事監督は危険千萬なりと、然るに工夫等先生の不幸に同情し、孜孜として怠らず、其成績最も見るべし。品川町民驚いて曰く、土木の監督は盲に限るやうです。

車庫から熊

衆議院議員山口熊野先生、曾て同僚と紅葉館に飲み、歸途、最終の電車に乗る。時正に嚴冬、朔風雪を吹いて、寒威骨に徹す。然れども、先生酔餘車中に眠りて、夢驚かず。車體諸共車庫に投げ込まれる。偶ま巡視の監督來りて、先生を誰何す。先生覺めて、四顧茫然。既にして、徐ろに頭を掻きて、事情を陳じ、且つ端書大の名刺を出だして、辭し去る。監督一見、笑つて曰く、此雪だから、熊も車庫へ紛れ込んだのだらうテ。

酒樽の辯護

衆議院議員齋藤二郎先生酒樽の名あり、曾て一旗亭に上ぼり、飲む事長鯨の百川を吸ふが如く、酔ふて白襟飾に南無妙法蓮華經の七字を書し、踏々踵々、口に自作の經文を唱へて亭を出づ、查公之を見てキ印と誤認し、直ちに附近の精神病院に送らんとす、偶ま知友之を過ぎり、先生のために辯じて纒かに事無きを得たり、先生乃ち謝して曰く、君の説法によりて山川草木悉皆成佛

此お祝ひにドツカで飲み直ほさうか。

此野郎の正體

衆議院議員佐々木安五郎先生、容貌偉偉、膂力衆に過ぐ、一夕、舊友新派の諸將と某所に會し、痛飲淋漓、相携へて最終の電車に乗る、同乗の客に、一紳士あり、事を以て先生と争ふ、先生乃ち下車し、紳士を捉へて路傍の溝中に投ず、偶ま查公佩劍鏘然として來る、先生之を見て一計を案じ、同行の諸將と共に、此野郎逃げるなと連呼し

て逃走す、既にして紳士溝中を出で、また疾呼して曰く、
此野郎逃げるなと、查公呆然、此野郎の正體を知るに苦
む。

情意不投合

衆議院議員松田源治先生、詩吟に巧みなり、曾て同僚
と共に上野常盤華壇の法曹懇親會に列す、酒三行、起つ
て舞はんとする者あり、先生之を見て、其天野敬一先生
なるを知り、乃ち之に謂て曰く、僕は吟聲をやらうと、天

野先生直に之を遮り、君のやうな情意投合黨はイカン、
僕は獨吟でやると、遂に情意不投合に終る。

議論氣違

貴族院議員江木千之先生、豁達にして議論を好む、曾
て縣治局長たりし時、毎に部下を一室に集めて討論
會を開き、自ら議長となりて、其裁決に任ず、部下素より
之を喜ばずと雖も、先生の意を損せんことを懼れ、競ふ
て辯難論詰、口泡爲めに輕石とならんとす、先生之を見

て林喜し深更に及びて尙ほ閉會を宣せず部下大に惱む。

還曆は年號

衆議院議員鈴木久五郎先生成金黨の領袖として其名を知らる會て中野武管先生を訪ひて閑談し其齡を問ふ中野先生澄して答へて曰く吾に還曆なしと然るに鈴木先生無學にして還曆の意義を解せず心私かに思へらく之れ年號ならんと由て更に問ふて曰く還曆

は何年のお生れです

啞の箸問答

博進社理事山本留次先生會て米國に遊び邊陲の一驛に下車して附近の風光を賞し悠然車室に復らんとす時正さに停車時間過ぎ無情の汽車黒煙を吐いて去る先生大に驚き驛員に就いて善後策を講せんとせるも言語不通にして如何ともすべからずこゝに於て悄然驛内に待つ事十餘時間飢寒交もく至る先生堪へ

す頻りに手を以て箸の状を作り、飢餓を驛員に訴ふ。然れども、驛員もと箸を知らず、陞の問答不得要領に終りて、先生の體量爲めに一貫を減す。

芝居の仕掛

日本郵船會社横濱支店長永井久一郎先生初めて明治座に舊劇を觀、一番目新田義貞中幕平維盛二番目幡隨院長兵衛を以て連續せるものとし、爾來衆に告げて曰く、芝居と云ふものは實に善く出來てるものです、見

て居る中に時代が段々新しくなりますから予と、聴く者噴飯す。

車夫に落第して出世

東京鐵道會社取締役濱政弘先生未だ志を得ざるの時、故岩崎彌太郎先生の雷名を聞き、弊衣破袴、鬼の首大の糞入を腰にして、其門に至る。彌太郎先生之を見て奇とし、試みに其長所を問ふ。政弘先生答へて曰く、長所更に無しと、由て彌太郎先生に請ふて其車夫となる。居る

事三日、彌太郎先生笑つて告げて曰く、士族の車屋は落語に聞くべく實地に演ずべからずと、乃ち一書を三菱會社の重役に裁して直に政弘先生を事務員に補し、月俸三十圓を給せしむ、先生呆然云ふ處を知らず。

袴持參で訪問

金原明善先生、富鉅萬を積む、然れども平生二宮尊徳先生を崇拜し、勤儉力行會で倦まず、一日内用あり、風呂敷包を抱きて一貴族を訪ふ、執事之を見て私かに先生

を侮る、先生平然客室に至り、恭しく風呂敷包を開きて用意の袴を着け、威儀を正して接見を待つ、執事一見其早技に驚く。

藪を突いて蛇

韓海漁業會社創立委員長安藤謙介先生、平生好んで法螺を吹く曾て職を名古屋地方裁判所に奉じ、法螺を以て同僚を苦むること甚し、所長之を憂ひ、一日先生に告げて曰く、司法省でも君の法螺は問題になつてゐるや

うじやと蓋し之によりて其法螺を封せんとせるなり、然れども先生平然ソレでは司法省の奴等もチツトは話せると見えると之より吹くこと益々甚し所長之を見て陰かに蕪蛇を侮ゆれども及ばず。

磯の鮑

東京商業會議所會頭中野武營先生朝鮮に一會社を創立して甜菜糖製造に従ふの意あり偶ま會社令公布せられ世論囂々先生之を見て思へらく魚心あれば水

心あり此機を利用して大願成就を圖らざるべからずと乃ち會社令を辯護して極力總督府の意を迎ふるに努む然れども總督府の高官等先生の企圖を聞き密かに相議して曰く中野のやうな奴が甜菜糖など出願したら早速不許可にして遣らうと先生之を知らず精々總督府の提灯を持廻ること依然たり。

居眠重役

明治初年の怪傑羽田恭輔先生老來葆光社に在りて

社務を統ふ然れども先生毎日午後一時を過ぐれば必ず中央の椅子に倚りて居眠を事としまた社務を視す社員等之を見て指笑し静かに其傍らに至りて用を質せば先生緩かに兩眼を開きて卓上の簿書を一瞥し突如として大呼して曰くア、眠いと社員等膽を潰し之より午後また先生に用を質さるに決す。

通帳で詩の仕入

甲州の富豪若尾逸平先生六十の手習を以て書に巧

みなり然れども詩は天品にして修得また書の如くなる能はず先生之を憾み乃ち親近の一詩家と特約を結び若し自作の揮毫を先生に請ふ者あれば直に使を之に遣して代作に當らしめ通帳に記する處によりて毎月末代作料を拂ふ通帳を以て詩を仕入る者蓋し先生を以て元祖とす。

減らず口

芝浦製作所専務取締役太田黒重五郎先生曾て東京商

法講習所に露語を學び、業を卒えて後、三井物産會社に入る。時に數名の英人また同社に在り、先生乃ち英露アイノコ語を以て盛に之に議論を吹ツかく、英人解せず、呆然たり、先生之を見て澄して同僚に告げて曰く、吾は日英露三國語に通ず、而して毛唐は一國語のみ、御話にならずと、同僚其滅らす口に驚く。

チンチクリン

三井の元老朝吹英二先生、鐘ヶ淵紡績會社の經營に

與かり、平生棉花通を以て自ら居る、客あり、一日先生を其邸に訪ふ、先生例によりて棉花の講釋をなし、得々として之に告げて曰く、チンチクリンの棉花は、其質良好、世界多く其比を見ずと、客解せず、沈思多時、既にして其棉産地チウチクリンの誤なるを覺り、コレは頗るメウチキリンだと洒落て去る。

義齒搜索中

上越水力電氣會社取締役梅浦精一先生、曾て越後に

遊び高田の一旅館に投ず客あり先生を訪ひ問ふに電
氣事業を以てす先生乃ち名物翁飴を甜つて滔々辯ず
ること三十餘分談正さに酣にして突如語塞がり復た
言ふ能はざる者の如し客怪んで其故を問ふ先生苦笑
して答へて曰く義齒翁飴の誘拐に遭ひて行衛不明只
今搜索中……………。

遺言状の訂正

前の陸軍々醫總監男爵石黒忠直先生細心を以て聞

ゆ曾て家族を集めて之に告げて曰く經に之れあり如
電如露吾幸にして今健なりと雖も死期豫め測るべか
らず今に於て後事を定めずんば汝等無益の事に思ひ
を勞せんと由て遺言状を作りて一々死後の事を列記
し且つ一年一回必ず之を増補訂正す立關番等之を見
て笑つて曰く閣下の遺言状は教科書同様毎年改版に
なります。

現金主義

陸軍々醫總監醫學博士文學博士森林太郎先生一日、
割引切符を手にして白山より三田行の電車に乗る。此
日天大に雨ふり泥濘履を没す。婆子あり腰弓の如く車
掌に助けられて緩かに車臺に上り先生の傍に席を占
めんとす。先生佩劍を杖つき儼然として動かす。既にし
て電車猿樂町に至る。偶また故イーストレーキ先生の遺
子マリー嬢輕裝楚楚々として車内に入り来るあり。先生
之を見て直に席を起ち温顔之に告げて曰く、此處が空
いて居ます。

名文章

豫備海軍少將井上敏夫先生少うして海軍兵學寮の
入學試験に應せんとし、金澤より徒歩して東京に来る
然れども先生もと文に通せざるを以て、試験の前日一
先輩の許に至りて、問ふに作文の法を以てす。先輩咳一
咳教へて曰く、文は達意を尙ふ必ずしも法に拘るを要
せず。然れども、試みに書簡文に就きて言はんか、一筆啓
上を首とし、勿々頓首を尾とし、其間に用件を挿む。之れ

一般の法なりと先生大に喜びて試験場に至り友人に書籍を借る文の課題に對し直ちに「一筆啓上書籍を貸して呉れ草々頓首」と記して試験官に提出す試験官一見苦笑して曰く「コレはチト名文過ぎるよ」。

手真似で氣焔

陸軍中將男爵鮫島重雄先生風流を以て名あり前の陸軍御備教師メツケル先生また風流に於て鮫島先生に譲らず之を以て兩先生意氣相投じ肝膽相照し常に

相携えて屠門に上ぼる然れども一は獨語を知らず一は日語を解せず酒酣にして耳熱すれば互に手を以て氣焔の吐き競べをなす席に侍するの大妓小妓之を見て呆然たり。

因果觀面

陸軍歩兵大尉坂入良達先生曩に征露の役に従ひ具さに戦争の慘を見て慨然職を辭し商に隱る一日不慮の利あり乃ち一旗亭に登りて酒を呼び妓を聘し午前

二時其寓に歸る然れども令室の逆鱗に觸れんことを懼れ竊かに柱上の時計を取りて指針を前日の午後十
一時に轉じ思へらく此種の妙計孫吳も未だ知らざる
處と既にして午前八時を過ぎ先生覺むれども令室尙
ほ起さず先生之を見て怫然其疎懶を責む令室微笑し
時計を指して答へて曰くマダ六時前ですよと先生大
に凹む。

見合は無用

海軍大尉上村從儀先生西郷家より出でて上村家を襲ぐ媒妁者先生に山本家の令嬢を妻はせんとし一日見合を先生に勧む先生直に拒絶して曰く妻を操縦するは水雷艇を操縦するよりも容易なるべし見合は無用なり御轉婆にても苦からずと媒妁者其度胸に驚く。

品川の返事を神奈川

陸軍少將摺澤静夫先生深沈寡黙を以て部内に鳴る曾て日曜に際し同僚二三と横濱に遊ばんとし品川驛

より汽車に乗る、一同僚戯れに先生に問ふて曰く前日
曜足下を見ず思ふに單騎遠征かと先生黙々知らざる
ものゝ如く汽車神奈川驛に至る比突如之に答へて曰
く終日閉居別段申上ぐる事も無之候と、同僚啞然たり。

不得要領

海軍大將日高壯之丞先生、一日麻布三ノ橋より電車
に乗る、偶ま傍らを見れば、曾知の一操觚者あり、先生苦
笑し乗る積りで無かつたのじやが、ツイそのナンで、ナ

ンしたもののじやから………」と頻りに不得要領の分疏
を反覆す、操觚者笑ひを忍び、ハイ〜と謹聽して別る。

運動検事

函館控訴院検事法學士二瓶正藏先生平生意を運動
に用ひ、一日二回樞の八角棒を振廻して、筋骨の鍛鍊に
努むること十年一日の如し、曾て検事論告心得なる者
十ヶ條を作り、之を部下に示す、一に曰く姿勢は直立し
て頭を垂るべからず、二に曰く音聲は下腹部より出だ

さいるべからずと部下一見笑つて曰く丸で體操ですネ。

煙草屋の大番頭

專賣局長官濱口雄幸先生容貌偉偉鬚髯の如く喜怒色に現れず使丁等乃ち先生に綽名して「鬼局長」と云ひ平生之を畏るゝこと甚し客あり煙草の事を以て一日先生を大藏省に訪ふ先生直に出でて之に面し應對慇懃を極む客其容貌に不似合なるに驚き退いて嘆じ

て曰く流石は煙草屋の大番頭さんア、無くては勤まるまいテ。

手持無沙汰

鐵道院總裁男爵後藤新平先生和製ルーズベルトの尊號あり曾て浴に遊びて男山八幡宮に詣で歸途圓福寺に宗般老師を訪はんとす侍者其路遠く且つ炎熱甚しきの故を以て之を止む先生聽かず蠻勇を振ひて車を驅る事里餘流汗瀧の如く纒かに圓福寺に至る而か

も宗般老師一瞥平然先生のため、に席を與へず、先生頗る手持無沙汰を感じ、頻りに疊のケバを振りて去る。

矢野は糞野

矢野文雄先生曾て全權公使として清國に赴任し、要路の大官を歴訪して新任を披露せんとす、然るに清國の俗糞を矢といふ故に、矢野は即ち糞野にして、士君子の口にするを愧づる處、先生之がために頭痛三日に及ぶ。

蜘蛛の成敗

前の宮内大臣伯爵田中光顯先生風流を以て名あり、平生最も蜘蛛を惡み、岩淵の別墅に蜘蛛係りの園丁を置きて見るに、隨ひ之を成敗せしむ、客あり先生に謂つて曰く、蜘蛛は必ずしも不祥の物に非ず、吾脊子は來べき宵なりさ、かにの蜘蛛のふるまひ、今宵知るしもの、古歌以て之を證すべしと、先生微笑して答へて曰く、デモ女共はイヤがるからなア。

無粹大臣

法學博士子爵平田東助先生、前年農商務大臣として
愛知に赴く、愛知の官民等先生の謹嚴なるを聞きし、
妓をして良家の處女に扮して先生に侍せしむ、無粹者
の先生素より之を知らず、應對頗る慇懃なり、一聞僚之
を聞き、先生の歸京を待ちて、戯れに問ふに、此事を以て
す、先生ムキになつて辯解して曰く、アノ女は左様な汚
はしい者で御座らぬ。

シルクハットの轉落

前の總理大臣兼大藏大臣公爵桂太郎先生曾て故伊
藤公の靈柩を横須賀に迎へ、儀容端然、特別列車中の一
室を出でんとす、偶々頭上のシルクハット誤つてブラ
ットホームに落つ、先生大に驚きて車室を出で、恭しく
之を取上げて、其塵を拂ひ、且つ嘆じて曰く、滅多に帽子
に逃げられるやうな不都合な頭じや無いがなア。

迷兒公使

特命全權公使日置益先生曾て智利兼秘露駐在を命
せらる。交友乃ち祖道の宴を張りて其行を壯にす、一紳
士あり、席上先生に問ふて曰く閣下這次の駐在地如何
と、先生頭を掻きて答へて曰く前日唯辭命を受けし
み、駐在地に至ては未だ知るを得ずと、滿座呆然之より
先生を呼んで「迷兒公使」といふ。

酒屋に聞合せ

貴族院書記官寺田榮先生一夜泥酔して辻車に乗る
車夫先生に其行先を問ふ、先生答ふる事能はず、車夫大
に窮し、乃ち一々附近の酒店を叩いて問ふて曰く此旦
那に見覚えがありませんか。

天狗の鼻柱

東京府知事阿部浩先生、銃獵を好み、平生獵通を以つ

て自ら居る會て千葉に在り銃を肩にして山野を跋渉し、終日鴨を求めて得ず此に於て慨然として思へらく未明家を出で黄昏手を空しうして歸る斯くの如くば夫れ天狗の鼻柱を如何せんと由つて鳥屋に至り、窺かに鴨を購ひて歸らんとす、鳥屋の小僧冷笑して曰く、お氣の毒さま、手前共には打つた鳥は有りませんと、先生聞いて悄然として去る。

悪事露顯して絶交

貴族院書記官長太田峰三郎先生品行方正の君子と稱せらる、然れども曩に官命を帯びて歐洲に遊ぶや、慨然として思へらく名のために情を矯むるは愚の至なり、何をクヨク川端柳命の洗濯此機を逸すべからずと、乃ち至る處に地金を露はして密かに平生の鬱憤を遣る、一友風の便りに之を聞き、先生の歸朝を待ちて素破抜く、先生眞赤になつて辯解し、遂に之と絶交す。

不案内大臣

元の岸和田藩主子爵岡部長職先生貴族院より出て桂内閣の司法大臣となる然れども司法事務は素より先生の通せざる處之を以て就任以來一切の事属僚に委し常に之に告げて曰く法律の事は身共不案内なり卿等それ善きに取計り候へと属僚乃ち先生を呼んで不案内大臣といひ伴食大臣以上に敬遠す。

土方の親分

前の海軍大臣伯爵山本権兵衛先生身に七ツ下りの脊廣を纏ひ足に草鞋を穿ちて一日大森に遊び一旗亭に登りて酒肴を命ず婢其風采を見て土方の親分と誤認し冷遇を極む先生憤然として亭を出で舊友を訪ひて告ぐるに此事を以てす舊友笑つて問ふて曰く立腹は尤もじやがソレは鏡と相談の上かネ。

赤い舌鷹一郎

維新史編纂局長法學士赤司鷹一郎先生文部省中の業平と稱せられ屢々紅燈綠酒の間に遊びて同僚の無風流を罵り酔へば必ず雑技を擁して紅舌三寸ペロリと其頬を嘗む雑技等由て先生を呼んで赤い舌鷹一郎さん」と云ふ。

瞑目の二徳

前の拓殖局總裁柴田家門先生奇癖あり出づるに必ず車に乗り瞑目して行く客あり戯れに其故を問ふ先生大真面目に答へて曰く大風砂塵を飛ばすも狼狽目を蔽ふの要無く途上相識に遭ふも帽を脱して言を交ゆるの煩無し之れ瞑目の二徳なりと客聽いて其用意周到に驚く。

英氣の薬

前の農商務大臣大浦兼武先生曾て大阪府に書記官

たり、時の府知事山田信道先生、一日戯れに先生に藝者
買を勧む、先生苦虫を嚙潰して曰く私にはソナ馬鹿
な真似は出来ませんと、之より先生の謹嚴大に世に顯
る、而かも謹嚴此の如きの先生にして、夙に春宵秘戯の
圖を蒐集するの道樂あり、客怪みて其故を問ふ、先生平
然答へて曰く、英氣を養ふに用ゆるのじや。

勳四等先生

信州の素封家色部義太夫先生、日露戦後貴族院議員

たるの故を以て勳四等に叙せらる、先生之を以て無上
の榮譽とし、乃ち直に勳四等色部義太夫の大門標を新
調して之を根津の別邸に掲げ、且つ客に對すれば必ず
「私は勳四等の色部です」と吹聴して休まず、惡謔子あり、
之を聞き先生に面して故らに問ふて曰く「貴公は勳三
等の色部さんですか」と、先生啞然、纔かに答へて曰く「三
等迄には鳥渡手間が取れます」。

女子は不淨物

元の彦根藩主伯爵井伊直忠先生女子を以て不浄近づくべからずとし、山海の珍味と雖も、女子の手に成れるものは決して之を口にせず、一同爵之を奇とし、戯れに先生に問ふて曰く、子既に女子を以て不浄物とす、而かも時に艶聞を馳する之れ如何と、先生真紅になつて辯解し、且つ曰く、不浄物には精々近寄らぬやうに致し居る。

晩合ひの別宴

貴族院議員關清英先生放膽にして議論を好む、曾て佐賀縣知事に任せられ、將さに其地に向はんとす、故大木喬任伯之を聞き、一書を先生に送りて曰く、子近く佐賀に赴任すと聞く、佐賀は子の故郷にして、又吾が墳墓の地なり、願くば子と會して、一夕の歡を共にするを得んかと、先生大に喜びて伯を訪ふ、而かも議論好きの兩先生不幸にして見る處を同じうせず、爲めに大議論の末、晩合ひて別る。

疊表先生

陸軍經理學校教授栗田貞三先生前年法學博士岸本辰雄先生の令嬢を娶り、幾許もなくして去る之より室を更ゆること實に六たび世或は其良縁に乏しきを憾む而かも先生平然常に衆に告げて曰く、嬢と疊の表とは新しきを貴ぶと、學生等乃ち先生を呼で「疊表先生」といふ。

實利主義

醫學士押川公介先生前年宮古病院に聘せられて院務を統ぶ居る事三年、町民先生の勵精に酬ひんとし、贈るに金時計一個を以てす、先生辭して曰く、厚意多謝然れども、時計の有難さは現ナマの難有さに如かざるなりと、町民等恐縮乃ち現ナマを以て之に換え、初めて先生の嘉納を辱うする事を得たり。

合議制度の譯解

故重野安釋先生の嗣紹一郎先生前年佛國より歸りて早稻田大學に佛語を講じ屢々譯字に窮す此に於て搔頭數番學生等に告げて曰く僕漢學の智識に乏しく適切の譯字を知らず爾後譯解は合議制とし衆議によりて譯字の適否を決すべし諸君幸に意見の吐露に吝なる勿れと學生等聞いて其名案に驚く。

鍊膽の中毒

埼玉縣師範學校長小島政吉先生就任以來銳意事功を擧げんとし調査會研究會等の機關を設くる事雨よりも滋し學生等堪へず陰かに先生を怨む然れども先生平然更に鍊膽會なるものを創し深夜學生をして鬼火明滅の地に單獨冒險をなさしむ學生等之より神經衰弱症に罹り湯藥に親む者多し世之を傳へ聞いて鍊膽の中毒と云ふ。

飢饉の轉任

農學博士玉利喜造先生前年高等農林學校長として盛岡に赴任す、盛岡の市民風に先生の雷名を聞き、親しく其名論卓説に接せんことを樂む、然れども先生黙々多く語らず、偶ま目を開けば、東北の地必ず飢饉の襲來あるべきを説くのみ、市民等失望して、陰かに先生を飢饉博士と呼び、其鹿兒島に轉任するに及びて相戯れて曰く、飢饉轉任之より景氣恢復請合なり。

行員を泥棒扱

日本銀行總裁男爵高橋是清先生曾て横濱正金銀行に在り、一腹心に命じて、行員の寫眞及び筆蹟を集めしむ、腹心怪みて之を先生に問ふ、先生答へて曰く、行金でも持逃げした時の用意じやと、行員傳へ聞いて其泥棒扱ひに驚く。

帽子を冠つて理髮

千葉中學校長文學士吉田賢龍先生年二十にして頭
髮悉く脱落し禿山兀として阿呆驚くの嘆あり一日床
屋に至り帽は脱せずして椅子に倚る小僧之を見て低
頭數番問ふて曰く刈りますか剃りますか先生答へて
曰く刈るのちや小僧乃ち恭しく頭上の帽を取れば朝
嗽既に山を出で、靈光燦然得て正視すべからず先生
苦笑して告げて曰く帽子のまゝ後ろ丈け刈つたら善
からう。

六百六號先生

東京府立第一中學校長川田正徵先生禿頭燦灼とし
て百燭光の尊號あり然れども元氣旺盛にして帽子冠
ぶれば色男の風流を忘れず常に遊蜂となりて香を趁
ひ痴蝶となりて花に戯れ遂に眞言秘密の病に罹る先
生大に驚き乃ち密かに草津温泉に赴きて治療に努む
ること數旬病稍息るに及び洒然として登校す學生等
之を見て連呼して曰くシツクスバンドレッドシツク

ス(六百六)と先生聞いて苦笑し頭上の汗を拭ふこと實に六百六回。——甲午年某日「日」

西洋見物は法度

日本郵船會社專務取締役岩永省一先生前年歐洲に遊び英佛獨伊の諸國に至る嚮導者先生を以て赤毛布となし思らく「コンナ御客様には難有い處を見せるに限ると由て先生に勸めて至る處寺院を見せしむ先生之に中てられて神經衰弱を起し歸來家族に命を布い

て曰く「西洋見物は子々孫々法度たるべし」。

土藏で端唄の稽古

大日本麥酒會社取締役馬越恭平先生初め無藝大食を標榜し紅燈綠酒の間に遊びて唯飲み唯食らふのみ酒友梅浦精一先生之を憂ひ一日先生に告げて曰く君の美音を以て若し端唄を習はば塵梁上に飛び魚池中に躍り席に侍するの大妓小妓ベタボロの靈驗を見るべしと先生大に喜び之より土藏に籠りて不穩の音を

發すること頻りなり。一家怪みて其故を問ふ。先生答へて曰く、土蔵の中なら、糞味膾は大丈夫だらう。

お經を讀んで手術

日本郵船會社副社長加藤正義先生、僕麻質斯を病み、大學病院に至りて股を切開せんとす。刀を執るの醫學博士佐藤三吉先生之に告げて曰く、切開の個所は長さ六寸に亘る、宜しく魔睡劑を用ゐて其苦痛を去るべしと、先生晒つて曰く、僕禪を學ぶこと茲に年あり、面壁九

年の修養なしと雖も、焉を魔睡劑を用ゆるの愚をなすべけんやと、乃ち靜かに經を誦して手術を乞ふ。佐藤先生驚きて曰く、成程此元氣でなければ萬龍を射落せまいテ。

見送りの目的

農法學博士新渡戸稻造先生、曩に臺灣より歸京の途に上るや、臺北淑女連の見送り頗る多し。先生眞面目腐つて之に謂つて曰く、這個炎天に際し、淑女諸姉の見送

りを辱うす、予の光榮何物かまた之に過ぎんや然れども翻て思ふ、諸姉今日の目的たる實は予と同船の川上音次郎同貞奴乃至一座諸優の素顔を見るに在りて存じ予の如きは唯其ダシに使はれたるに非ざるやを果して然らば予たる者善い面の皮なる哉と淑女連相顧みてオヤ／＼を連發し以て機かにテレ隠しをなす。

パリストル一代の奇智

文部大臣長谷場純孝先生前年一隊の陣笠を率ゐて

愛知縣に遊説し、他の地盤を荒して狼藉至らざるなく、進んで龜崎望洲樓に次す、パリストル清水市太郎先生之を聞いて周章狼狽し直ちに阿嬌を携へて愛知に急行し、政友軍の隣室に陣取りてツザク散らすこと頻りなり、陣笠等、岡焼き極つて野武士の本性を露はし、破鐘の如き聲を出だし來りて演説の技を演じ、以て之に對戦すと雖も遂に敵すること能はず、福井三郎先生を軍使として哀を乞ひ、機かにパリストルを退却せしむ、樓の婢等之を傳へ聞きて自らテ間が悪いでせう。

危険思想防遏の妙案

名古屋の眼科野村朗先生、花火狂として名あり、常に曰く、世道人心に益ある者、花火に若くはなし、吾三河に於て花火を揚ぐることも最も多き年は、青年の金錢を浪費すること最も少く、花柳病者亦最も減少す、之れ花火製造中は決して不淨に接せず、花火打揚に及びては、之に熱狂して又他を顧みるの違なきによる、如今政府は危険思想防遏に苦むと雖も、未だ妙案あるを聞かず、

何すれぞそれ智慮に乏しきや、一發の花火轟然として、天空に飛ぶの時、誰かまた危険思想を貯ふるの餘地あらんや、吳越肩を接し、源平相竝ぶと雖も、未だ曾て花火を望みて争ひたるを聞かず、危険思想防遏の妙案は、彼墮落の徒輩を集めて、花火を觀せしむるより善きはなしと、聽く者其珍説に驚く。

生存中に香奠徴收

臺北龍口街臺灣總督府中學校に教諭あり、黃葉秋造

先生と云ふ青英に従ふ事三十餘年曩に新渡戸稻造先生の臺北に遊ぶや舊友の誼みを以て一夕晚餐を共にす談偶ま其門下生の事に及び新渡戸先生夏目漱石子の事を説いて頻りに其舊門下なるを誇る黄葉先生之を聞いて笑つて曰く漱石とはかの猫の事なるか然らば試みに吾舊門下を挙げむ曰く柴田家門曰く瀬川秀雄曰く上田恭輔曰く熊谷喜一郎曰く齋藤精輔數へ奉れば猫の如き言ふに足らざるのみと新渡戸先生爲めに顔色なし聞く黄葉先生一妙案を工夫し舊門下の誼

名士に對し生存中香奠を徵收するの計畫あり賛成者頗る多しと。

禁酒は眞平御免

陸軍教育總監淺田信興先生久しく胃病の胃す處となり醫藥更に效を奏せず主治醫憂慮して切りに静養加餐を勸む先生肯せずして曰く公務多端焉んぞ這個閑日月を有せんやと主治醫強ひること能はず乃ち膝を這めて曰く然らば斷然酒を禁せよと先生苦笑して

曰く好物の酒を禁じて迄も生延ぶるの必要を見ず、禁酒は眞平御免なりと、主治醫啞然たり。

御入來は法度

石原健三先生、先年北海道長官に任せられて、其地に赴く道民先生の浪花節に巧みなるを聞知し、歓迎會の席上特に妓をして浪花節を演せしむ。先生御機嫌大に斜めに大喝一聲叱して曰く、咄之を止めよ、何爲れぞ賤妓にして敢て浪花節を演ずると、一座潛伏して其無作

法を謝し、爾來相戒めて假初めにも御入來を口にする者なし。

愛惜の茅屋

才賀藤吉先生、平生自ら奉ずること極めて薄く、大阪御影の住宅の如き、纔かに膝を容るゝに足るのみ、訪客之を見て先生の體面に關すとなし、別に邸宅の新築を勸めて已まず、先生遂に屈し、前年濫々新邸を築く、而かも舊草廬に別るゝに忍びずとし、別に敷地を購ひて之

を遷し、日夕愛惜して措かず、然るに其敷地たる敷寄を極めたる諸邸宅の間に介在するを以て、附近の富豪之を以て目障りとなし、遂に先生に交渉するに其取拂ひを以てす、先生其無禮を怒り、一喝の下に之を斥くと雖も、富豪等或は叩頭し或は哀願し來りて眞に執拗を極む、此に於て先生容を改めて曰く、吾茅屋にして爾かく諸君の邪魔をなさば、願はくは諸君自ら之に火を放つて焼け、吾は手づから之を取毀つに忍びざるなりと、富豪等之より復た取拂ひの事を言はず。

木貫女史の講釋

犬養毅河野廣中諸先生の一行、前年淡路に出征して洲本の一旅館に入る、婢あり、大兵肥満、白大の髻を掻げ來りて、握乎之を諸先生の前に投下す、犬養先生之を異とし、敢て其名を問ふ、婢悠然として答へて曰く、「モククワン女史なり」として、其字を問へば、則ち曰く、「モククは木なり、クワンは貫なり、妾の體量正さに十八貫十八を一字にしたる者之を木となす、且つそれ木は國音氣に通

ず、氣を以て貫くは之れ妾の性のみ」と天井を睥睨して以て長嘯す。犬養先生更に其生地を問ふ、答へて曰く、「ラウクワの産なり」。先生解する能はず、婢笑殺して曰く、「諸君の無學なる何ぞ夫れ甚しきや、ラウクワは俗に之を大阪と稱し、訓讀して浪華となす」と、諸先生煙に捲かれて言ふ處を知らず、乃ち命するに酒を以てす、婢問ふて曰く、「以てセイソウを侑むべきか」。一座能く解する者なし、此に於て、婢慨嘆之を久しうして曰く、「妾今にして諸君の能く語るに足らざるを知る夫れセイソウは正宗

なり、ビールは之を麥酒と稱す」と、一座潛伏して纔かにセイソウを乞ひ、流石の犬養先生兜を脱ぐ。

奇珍
閑談
名士の片影
終

島貫兵太夫氏

有體にいふ、白いものは塗つて居るが御縹緞あまり
宜しからざる海老茶式部に導かれて西洋間へ通る
椅子に腰を下ろすと、先づ目につくは面會五分間と
いふ壁の貼紙五分間とは心細いと聊か不足を感ずる、
見れば、其傍らにはまた貼紙があつて、面會の御方は直
に御着席被下度候、「喫煙は御断りします」など書いて
ある、鳥渡電車へ乗つた積りで居れば間違がないなど
思ふ。

一方の壁には、ブースとリンコルンの畫像が懸けてある。畫は二つとも善く出来てゐるが、殊に特徴あるリンコルンの顔が目につく。

暫くして出て來られた島貫兵太夫氏、面貌何處やら壁上のリンコルンに似て居る殊に觀骨の秀でてゐる處などは、畫像ソツクリである。なぜ、是迄和製のリンコルンといふ異名が無かつたかなど怪む。

氏の應接振は中々巧いものである。言葉に東北の訛りこそあれ、滔々として力行會の事業を説く處、確かに

一廉の辯士と云つて妨げない。天下を救ふ積りで郷里を出て來たが、口力では中々救へぬと述懐しつゝ、起つて暖爐の前へ行き、手で其口を開けたかと思ふと、足でまたピシヤンと閉める。天下を救ふに手と足を以てする、宜しく此くの如くなるべし！

五分の面會時間が三十分を過ぎても、氏は尙ほ其事業を説いて止まぬ。此處には東北の者が多い、東北の者は一見氣が利かぬやうであるが、外交官的素質を備へてゐるから、米國あたりでも評判が善いなど云ふ。此言は

直に移して以て氏を評すべきで無からうか
 長居は禮にあらすと席を起つて、フト卓子の上を見
 ると、青く塗つた木の函があつて、それに穴が明けてあ
 る、ハテ、ナンだらうと注意して見れば、如何程にても寄
 附を願ひますと讀める、燈臺下暗しで、是迄氣がつかな
 かつたは笑止千萬、一禮して辭し去る

○近藤裕子刀自

玄關に訪れると、ポロ／＼になつた木線の筒袖を着
 用に及んだ婆さんが出て来る、御隠居さんはと尋ぬれ

ば私は近藤の婆ですといふ、之は音に聞く裕子刀自か
 と、先づ其意外に驚く
 導かれて座敷へ通る、見れば床の間には釋迦成道の
 圓傍らの押入には佛像やら佛器やらを飾つて机の上
 にはまた御經が載せてある、南隱禪師のお弟子とは聞
 いて居たが、實際家の様子を見るに及んで、其尼寺然た
 るに驚く

有體に白状すれば、刀自の名を聞いた時、板額然たる
 其容貌を心裡に描かすには居られなかつたのである

處が實際刀自に遭つて見ると大違ひ材も高からず、顔も至て柔和で、ドウ見てもタゞのお婆さん、コレはコレはとまた其意外に驚く

聞けば、刀自は一子彦太郎君を失つてから、此處に閉籠つて、アマリ世間へ出ないとの事、家族とても別に無い様子、定めてお淋しいでしやうと云へば、修行には却てこの方が善う御座いますと澄したも、其言ふことの尋常ならざるに驚く

「御茶を入れましやうと言ひつゝ、起つて奥の三疊へ

行き寄席で用ゆるやうな大々的古土瓶を持出す、コレはまた物に拘らざる事非常なりと驚く
折から十四五歳の巡禮が来る、刀自は起つて玄關へ行き、善う来て下さつたと言ひつゝ、親しげに話し始める話の様子で察すると、長い馴染のやう、其處へまた和服の紳士と續いて女教師と云つた様な客が来る、之は皆親しい間柄かと、其交遊の廣さに驚く
巡禮が歸らうとする、刀自は財布から二十錢の銀貨を一つ取出し、今日は生憎之れ一つだから、イクラで

もオツリを下さいと云つて自分で九錢を受取り、また思ひ出したやうに、奥から古い繻絆を持つて来て、どうぞお持ちなされと頼むやうに與へる。施與が道樂だと聞いたが、實地に之を見て其善根に驚く。客があるもので、之れ位驚いて辭し去る。

○清川乾々居士

茅葺の庵室は、いかにも仙術研究者の住居らしい門内の石燈籠は、庵主の舊友幸田露伴氏から贈られたも

のとやら、御出で御座いますか」と尋ねれば「居ります」と答へて、此通り開ですから、お上がりなさい」と庵主自身の取次だから、誠に物事が早い。一風變つた水甕の火鉢を中間に相對して座を構え、座敷には机が二脚あつて、笹竹やら算木やらが載せてある。脇床に積んである書籍は、無論大部分仙術に関するもので、其中には、高橋太華氏の清國土産とか云ふ珍書なども有るのであらう。

庵主乾々居士は、年の頃四十五六、鼻の下と願とは

申譯ばかりの髯があつて、黒つばい縞の着物に、鐵色無紋の羽織を着た處は、鳥渡吳服屋の番頭君が、道樂に易者になつたと云ふやうにも見へる。阿爺は蒔繪など違つて居りましたが、先年亡くなりましたと云ふから、居士は塗物屋の若旦那に生れたのであらうが、ソレで、井警視總監などと、其昔し司法省の法律學校に居た、傑だと聞いては、聊か意外である。

「書生時代に兵書を愛讀したものです。が、八陣の法などは、皆易で説いてありますから、ツイ易を研究するやうになつたので……」など語る。天源養氣學はと問へば、「コレは、妙な因縁で、瀧澤明久翁から傳へられたので、一口に言へば、精神修養法なんです」と答へる。居士が十年ばかり參禪したと云ふのも、亦此精神修養法研究の爲めであつたかと思はれる。

七十ばかりの老翁が、飄然と庭に来て、ソコをブラついて居たかと思ふと、忽ちまた飄然と立去る。御近邊のお方ですかと尋ねれば、「アレは、橘諸徳と云つて、直ぐ向ひの寺に居る、漢法の先生です」と説明し、ソレから話

が居士得意の感通療法に移る
 居士の風采態度は思つた程脱俗超凡で無い併し其
 經歷は頗る變化に富んで六七年前迄は酒樽を枕に、相
 手擇ばず氣焔を吐て居たものだとか聞く、ソレで同棲
 者が出来たのだから面白いが、久米仙と違つて通を失
 はずに居るやうである

○山田寒山氏

下谷は下谷町伊勢屋といふ炭屋の屋根に二尺に三

尺位の看板様のものがあつて、墨黒々と「寒山寺」と書いてある

「此奥です」と炭屋の小僧君に教へられ、無事に狭い路
 次を通つて、鳥渡右へ曲ると、突當りに清國蘇州寒山寺
 梵鐘再建事務所と二行に書いた札の懸けてあるは、之
 を之れ寒山氏の假の住居、鼻下に髯を蓄へた事務員(?)
 に聞くと、氏は五分ばかり前に美術協會へ出掛けたと
 云ふ、十年前渡清の砌、青天井の下で宴を張つた氏の事
 だから協會の陶器即賣所を應接室と見ても妨げなか

らうと、踵を回して美術協會へ行く

初對面の挨拶宜しくあつて、腰掛臺に腰を下るすと、

先づ故伊藤公の筆に成つた「寒山寺」の額が目につく。ド

ウ云ふ御縁で、アチラの御住職になつたのですか」と問

へば、「先年渡清の砌、寒山寺へ参りましたが、アチラには

参拜者が其姓名を壁書する習慣があるので、私も戯れ

に山田寒山之に住すと書いたのです。ソレがツイ縁に

なりましたナ……」と笑ひ、愈々住職になつて見ると、夜

半鐘の無くなつたのが氣になつて堪らず、段々其行術

を調べますと、日本へ渡つて、加賀の去る寺に在ると云

ふ事は分りましたが、惜い事には鎔して鑄物に使つて

仕舞つたさうです、無風流な坊さんも有れば有るもの

ですなア」と嘆せられる、陶器談やら、篆刻談やら話が面

白いので、其邊に居た車夫などが皆傍聴者になる

氏は六十歳位であらうか、頭は大分禿げて所々に毛

があるばかり、月落ち鴉鳴いて夜が明けさうである、丸

い顔は、見た處如何にも福相で、頭の白髯を捻りつゝ、語

る處は、寧ろ美術家と云ひたいやう、渡清の目的も吳儂

卿に就て篆刻を學ぶに在つたと云ふから夜半鐘で名高い寒山寺で無ければヨシ勸められた處で住職にはならなかつたので有らうなどと考へて歸る

○板谷波山氏

「波山焼陶器工場」といふ瓦斯燈を便りに瀧の川第一尋常小學校の垣に沿ひ夜前の雨で一時に咲いた櫻の下を通つて幅一間ばかりの徑を行けば可憐な菜種の間に四五軒の家が見ゆる角の西洋館は此處の草創維

塚氏の書室で其處から左に見ゆる三棟の建物は所謂「波山焼」の工場と知られる

「御出で御座いますか」と尋ねれば三四間もある土間を隔てた障子の内で誰やらが「ハイ」と答へると同時に土間に續いた板の間で不意に「お上がりなさい」と云ふ聲がする振向いて見れば怪しい木綿の筒袖に野袴を穿いた聲の主「コチラへ」と言つて早速別棟の一室に案内し椅子などを薦める處を見ると別に名乗りはせぬが多分板谷氏であらう

「閑静で宜しう御座いますなア」と云へば氏は首肯い
て「五六年前迄は、椎塚君の家が一軒あつたばかり、其頃
留守と知つた泥棒が家財を車に積んで悠々と立去つ
たと云ふ事です」と笑はれる

室の兩側には色々變つた陶器が飾つてある「アレは
参考品ですか」と問へば「ソウです」と答へて「其中の九谷
焼を指さし「御覽の通り九谷には色々あります、コレは
其地の製造家が常に時代々々の嗜好と云ふ事を考へ
て必しも在來の型に拘らなかつたからです……」など

説明する

「恭しく火鉢を持つて來た令閨は、氏と同じ様に怪し
い筒袖を着て居る客間に整然と飾られて、見る目に美
しいのは唯陶器ばかり室内の器具も家族の服装も、皆
氏の無頓着を證して居る

話が進むに連れ興が湧く折から番茶と鹽煎餅とを
持つて來た女の子、打ち見た處、少くとも三日位は顔を
洗はぬやうであるが、事によつたら令嬢かも知れぬ
氏は非常な精力家である、此間も美術工藝展覽會に

出品しゅひんするためために十日じゅうにちばかり徹夜てつやしたとやら「たい道樂だうがくにやつてるので……」と一笑せうせられたが鼻はなの落おちる道樂だうがくと違ちがつて真まに其道そのみちを樂たのむのだから面白おもしろい

○長谷川泰氏

二階にかいの西洋間せいやうまへ通とほされる

懷手なつかしてヒョッコリ出でて來こられた氏の風采ふうさいは如何いかにも飄逸ひょういつである寒さむいからと云いつて女中ぢゆうぢゆうに座蒲團ざぼたんを命めいじ、ソレを暖爐だんろの前まへに敷しいて坐すつた處ところは竹林七賢ちくりんしちけん之圖のず

にでも有ありさうである「お話を伺うかがひたいと思おもつて出でましたが……」と云いふとドウ致いたしまして私わたし如ごときものに……」と尋常じんじやうの御挨拶ごあいさつ之これは聊いさか意外いがいと思おもつて控ひかえてる中に、ソロ／＼形勢けいせい不穩ふえんとなつて來きて氏し一流いちりゆうの冷嘲熱罵れいてうねつばが口くちを衝ついて出でる

「私わたしが明治めいし二十五年にんごに厚生館こうせいくわんでした演説えんぜつは五萬五千ごまんごせん言げん然しかるにドウです其時そのときの速記そくきには一字いちじも誤あやりが無い、ソレが近頃ちかごろナニか速記者そくきしゃに話はなして、アトで原稿げんかうを取寄とりて見みると、マルで嘘うそである甚はなはしきは其間そのまひだに二枚まい

も三枚も白紙が混つて居ると云ふ體裁之れでは全く用が足りないと思ふがドウです。私は新聞雑誌に毎日書く位の愚論は持つて居る併し之を話すと誤つて傳へらるゝから一切お断りしてある全體新聞の論説などは馬鹿で無ければ讀まぬ論説は譬へば羽織の紐の如きものドコへでもクツ、クと思ふがドウです。突然大きな聲で女中を呼んだが返事が無いので、ツト起つて階子段の處へ行き更に大きな聲で用事を命

する併し女中も氏の疝癪に馴れてか別段恐縮の體もなく、平然用事を聞いて行く。社會の耳目たる新聞紙其新聞紙にも嘘ばかり書いてあるがドウです。憶測の憶を憶に書き専門の門を問に書くなどは普通の事甚しきは尾藤二州の尾州にオフジと振假名し狩野法眼の狩野にカリノと振假名したのが有つたやうに記憶する新聞の名は言はぬが平生大新聞で候と威張つてる癖に丁未俱樂部の丁未にデンマルクと振假名したのもあつた何

事も嘘で通るから恐ろしい世の中と言はざるを得ぬ。
 ……地名辭書を書いて博士になつた吉田東伍と云ふ男、アノ男が河井繼之助の事を書いたのを見たに、丸で嘘である。然るに新潟の新聞が麗々しく之を轉載してゐるがドウです。」
 風を引いてゐるのか談話中鼻をクンクンと鳴らされる

「酒精ばかり飲むと口が焼けて仕舞ふから水を割つて用ゆる、水は即ち嘘である。私は、嘘で通る世の中は」

猶ほ酒の如しと云ひたいドウです。」
 「御尤もです」と答へて辭し去る

○川面凡兒氏

谷中は三崎町の郵便局から北を指して物の一丁目も行く、左手に宗林寺といふ寺がある、寺の垣の盡くる處には、自然木の柱があつて、ソレに打ちつけてある札が鳥渡目につく、ハテ、車馬通行止の札としてはチト御丁寧過ぎるやうだと、何氣なく近づいて見れば、珍無類

の文字で「大日本世界教毎月第一第二日曜日講演稜威會本部」

早速其路次を這入つて突當りの本部を訪れる稍あつて玄關に現れたは此處の留守番でもあらうか色の黒い鼻の下と願とに髻のある四十五六歳の先生黒つぽい木綿の着物に同じ紋附の羽織を着けて足に穿ける足袋のみ際立つて白い試みに會のお方は「と聞くと平然として私は川面です」と名乗られる驚くべし留守番と思つた此先生こそ誰あらう大日本世界教の教祖

川面凡兒氏なのである

事の意外に面喰らひつゝ導かるゝが儘に座敷へも通る南向きの障子際には一脚の机があつて之に對して座を構へた氏の風采は失禮乍ら大道の易者以上には見へぬ机の上には一個の菓子折が載せてあつて其蓋に「魂泉」と書いてある處を見ると硯箱の代用でがナあらう其傍らには農家で使ふ大きな竹の土篩がある。原稿様のものを之に積んで其上にピカ／＼した鐵物を載せてあるは、マサカ鍊金術の材料でもあるまいと

熟考に及んだ結果、ヤット文鏡の代用と知れる机の下
 の炭取はまた頗る振つたもので、東北地方の野菜籠を
 其儘用ひたもの籠の目が鬼の涙よりもズット大きい
 から、中に色々の造作を施して炭の粉のゴボレない機
 に工夫してある

斯かる異様の道具立の中に、易者然たる世界教の教
 祖は、皺苦茶になつた白紙の中から、刻煙草を摘み取つ
 て、珍無類の筆の軸の様なものに詰めては、スバリと
 召上がる

床の間はと見ると、神殿の様なものを構らへて、饅頭
 の正宗、味淋などが供へてある。御神酒上からの神は無
 いとやらで、此處の神様も御多分に洩れぬと見える。一
 段低い處には、白木の三方に、木で作つた鯛などが載せ
 てあつて、頗る景氣が善い。神殿に續いた壁際には、古新
 聞に包んだものを山の様に積んである。療する處、川面
 氏の著書であらう

易者然たる氏の風采を見て、驚く者は、東西古今の哲
 學者を、小學校の生徒位にし、か思つて居らぬ氏の説法

を聞くに及んで更に驚かずに居られまい實際氏は非常な談理家で、私の話は、大抵の者には分らぬと云つて居る、釋迦山を出で、法を説きし時、聽く者、譬の如く、座の如しとか言ふから、聽者に分らぬ處が却て氏の得意とする處かも知れぬ、聞けば、現在の會員は千あまりで辯護士など云ふ理屈好きの階級が最も多數を占めてゐるとの事、矢張祈禱などしますかと云ふと、吉凶禍福ありてこそ現世、ソンの下劣な事は致さぬと申聞かされる

留守番と思つた此教祖から、大膽至極の主張と抱負とを聞いて、イツレまたとお茶を濁しつゝ、引下がらる

○物集高見氏

三度目の訪問に復たも病中と聞き聊か心細さを感じる、と急に風模様が変わつて来て、奥の十八疊間へ通される、見れば、蒔繪の器物やら、金屏風やら、其邊の綺羅びやかな事夥しい、一生本蟲になる覺悟だと云ふ博士の住居としては、チト貴族的に過ぎはしないかと、餘計な心

配に及ぶ

縞の着物に縞の羽織を着て、チニコくと出て來られた博士は、身長恐らくは五尺に足るまい、單に其風采を以てすれば、骨董の周旋でもしさうである。

「私が小辭典を出版したのは明治十一年之が先づ日本字引の初めと云つて宜しい、辭典辭林など云ふ熟字は私が初めて使つたもの、然るに此字のつく字引が現に五十餘種もあるといふ、妙なもので……」
文治武斷……
此武斷といふ字は、末松謙澄が日々新聞に居た時、初め

で使つたのだと云つてゐるが、實は史記にあるなど語る。只今お拵らへになつてゐるのは、百科字典のやうなものと聞いて居ましたが……」と言ふと、それは二三の新開が誤り傳へたので……と笑ひながら、お國訛りで諄々と其内容を説明する。

「開闢から天保までの本を數へて見ると、ザツト十五萬卷、其内二萬五千卷は不幸にして傳はつて居ないが、私は現に傳はつてゐる者丈けを整理したいと思ひ、明治十九年出來一切客を謝して、群書索引の編纂をして居

る併し之は書籍の無い田舎などにはアマリ用が無いから別に廣文庫と云つて六萬ばかりの事物を集めたものを編纂して居る之れ丈けでも大英百科全書よりはチト量が多い……」。

談話中絶えず身體を左右に揺かし且つ時々右の手で輕るく卓子を敲く。

「お暇にしやうと起ちかけると、博士は驚くべき大きな聲で「お歸り——」と呼ぶ、牛屋を除いては、アマリ斯う云ふ敬語に接した事のない自分は、大に面喰らひつゝ、

辭し去る。

○羅子珍氏

格子戸に手をかけたばかり、マダ「御免」とも何とも言はぬ中に、玄關の障子をガラリと明けて現れ出でたる一漢子「私、羅子珍」と名乗つて、早速奥へ案内されたには、鳥渡驚かされる。

エスキモー式の女中が、氏の命するがまゝに恭しく裏所から怪しい長火鉢を持出す、氏は「支那お茶、支那お

茶と云つて火鉢に懸けてある鐵葉の湯沸しから湯呑みへ茶を注いで呉れる。

日本花澤山ある樹澤山ある景色宜しい雪澤山降らない寒くない氣候宜しいなど話す「それでは、コナラで奥さんをお迎へになつては如何です」と言ふと支那女離れない日本女金で出来る直き離れる貴君新聞書いて下さい」と言つてカラ〜と笑ふ。

室の一隅には、四角な大きな枕のやうなものが二つ並べてある「アレはナンですか」と聞くと氏は早速横に

なつてソレに脈をかけて見せ「便利宜しい」と機能を言ふ此調子で蒙古語を教授したら定めし面白い事であらうと私かに外國語學校に於ける氏の講義振りを想像する。

机の上を見ると小皿の様なものに茶色の粉を盛つてある氏は私酒好き毎晩飲む徳利で一つ飲むなど語つて右の手が其小皿に觸れたかと思ふと直ちに粉を摘み取つて鼻穴へ塗る「私煙草飲まぬ鼻煙草飲む」と云ふから粉は多分鼻煙草であらうか。

氏は笑上戸と云ふのでも有るまいが絶えず笑つて居る。なにか言つたアトで必ずハツハと大きな聲で笑ふ。用事があつて神田へ出掛けると聞き、再會を約してお暇にする。

○富田鐵之助氏

「御病中ですが何か急ぎの御用事でも……」と取次の老女に訊かれ、別段急ぎと云ふ程でもありませんが……と頗る曖昧な事を言つて、兎も角も案内して貰ふ。

長い廊下を通つて、突當りの四疊半に行けば机に對して端然と坐つて居られた氏は、初對面の挨拶が済むや否や、自分の名刺を取り上げて、妙な苗字だなア、コリヤ一體ナンと讀むんだいと訊かれる。自分でもアマリ評判の善い苗字とは思つて居ない者の、コウ露骨に訊かれては、鳥渡マゴつかざるを得ぬ。
「君は弘前かい、俺等は仙臺と言つて、弘前には俺等の朋友も大分有つたが、皆死んで仕舞つた……陸實……實に惜しい事をしたなナ……併し俺等のやうに毫碌

して生きて居ても、一向詰まらんよと感慨を洩らされる。

八十歳に近い氏は、髪も髯も雪の如くである袴の状りにや、縞の前掛を締め、羽織の上には花色の被布を纏ふた處、鳥渡昔しの儒者のやうにも見える。語が一轉、故若倉公の事に及ぶと、アレは俺等よりアトに米國へ來た留學生だよ、至極眞面目な方で、マダ六十位の者だらうに惜しい事をした……今の渡邊……奇抜な宮内大臣だ、なアと微笑される。

「ドツカへ御出掛になる事がありますか」と言へば、「三浦梧楼子」は近處だから、チヨイ／＼行く、アレも變り物だからなアと言ふ、アレもと言ふからには、氏自身も亦變り者と自信して居るのであらうか、或は嚴正、經直氏の如きは、世間から無理に變り物扱ひにされるのであらうか。

邸内は森として静かである、一禮して玄關へ出ると、前の老女も見えぬ、格子戸をガラリと明けたが、暢氣な犬は知らず顔に寝て居る、コレはまた非常な開放主義

だと、妙な處に感服しつゝ歸る。

○佐々木安五郎氏

麥畑の奥の支那風の門がソレと巡査が事細かに教へて呉れる見れば、住居に比して構内の廣い事夥しい。若しソコラに「牛羊成群」とでも來たら、一層支那風になるだらうなどと考へる。

支關で先目につくは、左右の壁に貼りつけてある「福徳」の石摺りである。之も支那風かと異様に感じつゝ、取

次に出た小女に導かれて、二階の八疊間へ通る。

床の間には、照山大兄仁大人座右など、斷り書きした書と畫とが懸けてある。多分氏歸朝の砌支那の豪傑連が送別の意を表したものであらう。壁には支那風の額、棚には支那風の器物、室内の裝飾は皆支那風に出来て居る。コンナ事では、一二ヶ月も氏の處に潜伏して、支那語の二三つも覺えた上、突然清國より歸朝と觸れ込んだら、其昔し能因法師が態々顔を日に晒して、秋風ぞ吹く白河の關と詠んだよりも、或は世間で驚くかも

知れぬと飛んだ處に山氣を出して見る。

トソと階子段を上つて来た氏は懐手して悠然と座に着く見れば關羽の尊號ある丈はに風采いかに堂々として居る若し支那流に書いたら容貌偉壯舞美なりと云ふ處序に肩に赤誌あり日月の狀の如しとでも来れば愈々妙であるがソソナものは多分御持合せなからうと思ふ。

「ベストはヘイスト、コレラはコルラで共に支那音然るに世間では西洋舶來の病のやうに思つて居るなど、

得意の三千九百年前の探検日誌を繰返し野はノールで水の義吉野熊野凡て野の字のつく處には水がある、上野下野は上つ池下つ池から出たもの、上野公園の上野も多分不忍の池から出たものであらうなどと語る。近きにまた森吉へ出掛けるので其準備に忙しいと聞きソソくにしてお暇にする。

○小西信八氏

黄昏の街に點燈のつく頃何となく陰鬱な盲啞學校

の官邸に訪れると、令嬢であらうが、シトヤカに出て来て、座敷へ案内する。

座敷は十二疊で、東西古今の書籍を以て埋められてある。中央の古びた一閑張りの机に對して坐を構へた小西氏、身には黒つばい縞の綿服を着け、風采から云ふと老農のやうである。

「御用向は」と頗る無愛想なお尋ねに、「御差支無ければ盲啞教育について少々伺ひたいと存じまして……」と答へると、初めて笑顔を示された氏は、極めて眞率な態度

度で諄々と説明される。

「啞は生れながらの者が多い。腦膜炎、其他の原因で失官する者は十一歳が限りで、十二歳以上で失官する者は先づ絶無と云つて宜しい。盲は之と反對で、二十代で失官する者もあれば、三十代で失官する者もある。四十代、五十代決して年齢に制限と云ふものが無い。文部省の調査によると、啞の六に對して、盲が四の割になつてゐるが、之は學齡兒童のみについての調査であつて、實際其數から云ふと、盲は啞の比で無から

うと思ひます。

「社會に出て活動してゐる點から云ふとドウなります」と問へばソレは無論盲の方が多いですと答へ現に衆議院には高木正年氏が居る、貝島炭坑には貝島嘉藏氏が居る、ト云ふやうなワケで……嘉藏氏の如きは炭質を見ること神の如く家兄大助氏の成功も實際氏に負ふ處多しと言はれた位ソレから故新島襄氏の同志として同志社創立に盡した山本覺馬氏、愛媛の模範村長として名高い森恒一郎氏、山勢門下の双壁と稱せられ

てる、今井、萩岡の兩氏之は皆盲ですからネなど語る。

話が進むにつれ、初め「無愛想だと思つた氏は段々親切な、忠實な、尊敬すべき天稟を現はして来る。

「西洋では蜂及び蟻の習慣研究を以て名高い博物學者ヒューバ、之れが盲で最も傑出してゐる者と云つて善からう、ヒューバの盲になつたのは、何でも廿四五歳の頃で、其時已にメリーと云ふ許嫁があつたとの事、然るにメリーの兩親は娘が可愛いため、盲になつたヒューバを思ひ切るやうに説き勧めたが、メリー

はトッしても肯かす不幸なるヒューバの許に嫁いで健氣にも一生其研究を助けたのだから感心なものである。貝島嘉藏氏の令室も矢張り兩親の離別談を耳にもかけずセメテ之からは目の代りにと云つて神妙に氏に事へてると聞いて居る斯う云ふ美談は廣く世間へ知らしたいと思ふ。

「啞の方では有名な方が有りませんか」と言ふと氏は「チア」と云つて鳥渡考へ有るには有つたらうが不幸にして傳はつて居ない。佛國には薄暗い地下室で見事類

子の像を彫刻した啞があつたと聞いているが此彫刻家は盲をも兼ねて居たので……四五年前世界を漫遊して我國にも來た佛國の彫刻家之は啞であつたが、さまで有名と云ふでも無いらしい……現代で先づ有名なのは米國のヘレン、ケラー嬢之も盲でまた啞であるが、其著吾生涯は我國にも翻譯されて居ると言ひつゝ、ト起つて本棚から原著を取出だして見せる。

「盲と啞と、ドナラが教育し悪いと云ふやうな事は有りませんか、一般に盲は温順だが啞はソウでも無いや

うに思はれて居るやうですが……と問へば氏は直に
之を遮つてソウ云ふ事は吾々の禁句になつて居る、ヨ
シんば、盲啞の間に多少傾向の相違があるにした處で、
一様に同情を以て教育すべき事と思ふと語られる、成
程不幸なる盲啞の教育に當る人は斯うなくてはなら
ぬだらうと衷心から敬意を表して辭し去る。

附錄 應接室終

明治四拾五年五月廿七日
印刷
明治四拾五年五月廿五日發行

著作權所有

發兌

文成社

振替東京一九四六七番
電話下谷三二二〇番
電話下谷三〇一一番

著作 東京市本郷區森川町一丁目一番地
發行 東京市本郷區森川町一丁目一番地
印刷 東京市神田區三崎町三丁目一丁目一番地
印刷 東京市神田區三崎町三丁目一丁目一番地
印刷 東京市本郷區森川町一丁目一番地

名士の片影
正價四拾五錢

文成社圖書大賣所

- | | | |
|--------------|-------------|---------|
| 同 東京市神田區 神保町 | 同 東京市北區 梅田町 | 同 盛文館 |
| 同 京橋區元敵寄屋町 | 同 京都市二條河原町 | 同 寶文館 |
| 同 京橋區尾張町 | 同 佛光寺烏丸 | 同 東技律書房 |
| 同 本郷區大學前 | 同 名古屋市本町三丁目 | 同 川瀬書店 |
| 同 神田區真神保町 | 同 廣島市鹽屋町 | 同 積善館支店 |
| 同 日本橋區本石町 | 同 福岡市博多中島町 | 同 博文社 |
| 同 京橋區西紺屋町 | 同 久留米市米屋町 | 同 菊竹金文堂 |
| 同 神田區錦町 | 同 熊本市新町 | 同 長崎書店 |
| 同 日本橋區數寄屋町 | 同 長野市大門町 | 同 西澤書店 |
| 同 神田區錦町 | 同 長岡市表四ノ丁 | 同 目黒書店 |
| 同 神田區表神保町 | 同 弘前市土手町 | 同 今泉書店 |
| 同 京橋區南傳馬町 | 同 青森市米町 | 同 今泉支店 |
| 同 本郷區本宮七町 | 同 盛岡市肴町 | 同 佐々木書店 |
| 同 日本橋區大傳馬町 | 同 秋田市大町 | 同 石川書店 |
| | 同 札幌區南一條 | 同 富貴堂書店 |
| | 同 大連市大山通 | 同 大阪屋書店 |
| | 同 清國邊陽 | 同 大阪屋支店 |

東京毎日 新聞記者 橋彈碁君著 小杉未醒君畫

忽六版 滑稽 百出 番茶一杯

菊半截書入 洋裝美本 正價三拾五錢 送料四錢

本書は落語の妙味ありて、而もクスグリの悪弊に陥らず、曾我廼家一流の輕妙ありて、而もおどけ、ふざけの缺點を避く……眞面目の裡におさゆべからざる自然の滑稽の妙味は著者と畫伯の獨特の輕快なる裡に描き出ださる。

笑へ、笑へ、眞面目な顔して心の底から笑へ！

文學博士 三上參次先生序
南 福本 誠先生序
尾池宜卿先生著

新刊 豐 大 閣

菊判三百五拾餘頁
上製頗美本函入
特價九拾錢
送料拾錢

快著出づ！三千歳の光輝ある吾國史中、最も適當なる日本人の代表的人物なる、豐太閣出づ！由來豐太閣に關する書は實に山積すと雖も、其山の如き傳記の十中七八は概ね是れ傳說的にして史實に乏しく、其眞面目を窺ふに足らず、著者はもと是れ當代の篤學者、犀利なる觀察と華麗なる詞想とに富む、今や著者が多年の苦心に依つて眞實の豐太閣は出現せり、見よ！豐太閣の眞面目を！彼が大度宏量、大志壯圖、細心堅忍、慈愛同情、理想方針、技術手段等適確の史實、熱烈の快筆、千古の偉人紙上に躍如たり、眞に是れ稀れに見るの一大快著ならずや

簡潔にして要領を得たる手紙は成功の秘訣也

新刊

社交の圓滿、取引の敏活、事業の成功、信用の増進等は實に簡潔にして要領を得たる手紙に依りて、始めて能く其の目的を達することを得べし。

文學士 内海弘藏先生著

實用 新書 翰文

四六判三百餘頁
洋裝頗美本
正價五拾錢
送料六錢

好評

本書は現代の要求せる新しき形式に従ひ最近のあらゆる問題を網羅し、最も實用的に編著せられしものなれば何人も日常座右に供へ置かば其便利と利益は蓋し莫大なるものあらん。

手紙の下手な人は常に莫大の損をなしつゝあり

文學士 內海弘藏先生著

版再 戰記文評釋

池邊義象先生 市原隆作先生著

版八 悲壯史蹟 屋島と壇の浦

文學士 內海弘藏先生著

版八 訂正 文章十講

文學士 成田秀三 堀田相爾共編

版七 新式文章辭典

三宅藏原兩博士 堀田相爾共編

版三 最新術語辭典

送正金三 六版總
料入美ク
金八本
八拾函
錢錢入

送正金四 六判
料入美ク
金八本
八拾函
錢錢入

送正金四 六判
料入美ク
金八本
八拾函
錢錢入

送正金四 六判
料入美ク
金八本
八拾函
錢錢入

送正金四 六判
料入美ク
金八本
八拾函
錢錢入

米國トロイ博士原著 山縣五十雄先生評傳 文學士水島耕一郎先生譯

版五 森林生活

源光行先生譯著 加納路平先生作歌 千勝義重先生校註

版參 和譯蒙求

柴田蕪君立案 李在衛門君記述

版再 相馬大作

文學士 若月保治先生著

版再 實用會話手ほどき

文學士 若月保治先生著

版三 英語獨習手ほどき

送正金四 六判
料入美ク
金八本
八拾函
錢錢入

送正金三 六判
料入美ク
金八本
八拾函
錢錢入

送正金三 六判
料入美ク
金八本
八拾函
錢錢入

送正金三 六判
料入美ク
金八本
八拾函
錢錢入

送正金三 六判
料入美ク
金八本
八拾函
錢錢入

芳賀文學博士序 文學士高木武 小野鍾山共編
新式作文辭典

文學士 小野秀雄 文學士 堀田相爾共編
中學讀書辭典

文學士野上豐一郎 文學士野村傳四 文學士小島耕一 耶共編
和英作文辭典

大隈伯爵 秋元子爵 三宅博士序 岡谷繁實先生著
日本全史

岡谷繁實先生著 ○大好評増版又増版
珍名將言行錄

送正金四 袖珍總ク
 料價入美本
 九拾八拾
 錢錢入ス

送正金袖 袖珍總ク
 料價字入ク
 四拾五
 錢錢本ス

送正天袖 袖珍總ク
 料價金付五
 八拾五
 錢錢本ス

送正金判 袖珍總ク
 料價付美凡壹
 拾圓五拾五
 錢錢冊頁

送正金判 袖珍總ク
 料價付美凡壹
 拾圓五拾五
 錢錢冊頁

文學士 沼波環音先生著
俳句の作り方

文學士 高木 武先生著
和歌の作り方

犬養木堂先生題字 貞金鐵州君著
文字の書き方

文學士 堀田相爾先生著
中等學科勉強法

文學士 堀田相爾先生著
獨學自修法

送正四 袖珍總ク
 料價參判洋
 四拾五
 錢錢裝

送正四 袖珍總ク
 料價參判洋
 四拾五
 錢錢裝

送並送 袖珍總ク
 料價製料四拾五
 錢錢錢錢

送正四 袖珍總ク
 料價參判洋
 四拾五
 錢錢裝

送正四 袖珍總ク
 料價參判洋
 四拾五
 錢錢裝

版三

青 年 と 禪

文學博士井上哲次郎先生序 東亞の光記者 秋山悟庵先生著

米國マーテン氏譯著 文學士 藤井默花先生譯

評好

偉 人 と 修 養

文學士 吉丸一昌先生編

評好

修 養 夜 話

文學士 高木 武先生著

版三

青 年 の 處 世 と 成 功

東亞の光編輯主任 浦谷南水先生著

評好

現 代 青 年 修 養 悟 道 法

送正四 價六判 料四拾美 錢錢本

送正四 價六判 料四拾美 錢錢本

送正菊 價中裁 料參拾美 錢錢本

送正四 價六判 料四拾美 錢錢本

送正菊 價中裁 料參拾美 錢錢本

版再

明 治 新 題 句 集

碧童先生 六花先生題句 宮取芳河士君編

版三

滑 稽 百 出 番 茶 一 杯

橋 高廣先生著 小杉未醒畫伯挿畫拾葉入

版三

三 紀 行

文學士 沼波瓊音先生著 齊藤松洲畫伯裝幀

版再

實 驗 家 庭 料 理 法

奈良女子高等師範學校講師 一月いせ子女史著

版再

帝 大 氣 質

泉 斜汀先生著 小杉未醒畫伯挿畫

送正袖 價貳拾美 料貳拾美 錢錢本

送正袖 價參拾美 料參拾美 錢錢本

送正四 價六判 料五拾美 錢錢本

送正四 價六判 料五拾美 錢錢本

送正四 價六判 料五拾美 錢錢本

版再

文學士 若月保治先生著
新 釋英文手紙の書き方

文學士 若月保治先生著

版再

註 釋英文法の覚え方

文學士 堀田相爾先生序 帝國青年教育會編

版三

文章の作り方

前東京朝日新聞記者渡邊萬藏先生著

版拾

手紙の作り方

文學士 高木 武先生著

版三

論文の作り方

評好

立 志 寶 鑑

關資院議員 梅法學博士序 帝國青年教育會編
文部省習字檢定試驗委員 稻川雲谿先生書
高等商業學校習字教授

版參拾

手 紙 と 葉 書

大野酒竹先生 沼波瓊音先生校訂 平福百穂畫伯裝幀

版再

芭蕉句選年考

內藤鳴雪先生題句 寒川風骨先生著

版參

贈 答 俳 句 集

文學士 沼波瓊音先生編 小杉未醒畫伯裝幀

版再

短 評 俳 句 撰

送正四 價六 料參判 四拾頗 五美 錢錢本

送正四 價六 料參判 四拾頗 五美 錢錢本

送正四 價六 料參判 四拾洋 錢錢裝

送正四 價六 料參判 四拾洋 錢錢裝

送正四 價六 料參判 四拾洋 錢錢裝

送正四 價六 料參判 四拾美 錢錢本

送正大 價和 料四級 六拾上 錢錢裝

送各判 菊判四百五拾頁上 編正價壹圓五拾錢 料各拾貳錢

送正四 價六 料參判 六拾美 錢錢本

送正袖 價珍 料貳拾美 七 錢錢本

通俗法律文庫

法學博士 占賀廉先生題字

法學博士 中村進先生序文

法律は自己を護る最良の武器なり
法學士 山崎晃君著

法學士 内田節三君著
法學通論

法學士 長谷川常太郎君著
通俗憲法要論

法學士 青木重康君著
刑法總論

法學士 青木重康君著
民法總則編

全三十冊 以下續刊

ボツケト入總クローヌ美本
各冊正價金參拾錢 送料各四錢

參版

岡谷繁實先生著
續名將言行錄

岡谷繁實先生著

參版

南朝の元勳

福本日南先生校 小野鍾山先生譯

再版

和譯 宋名臣言行錄

伯爵 大隈重信述

參版

大隈伯社會觀

立石駒吉先生編

再版

澁澤男爵 富源の開拓

菊判天金付美本
正價拾圓五拾錢
特料貳拾錢

菊判頗美本
正價拾貳拾錢
送正菊料拾錢

菊判美本函
正價拾圓
送正菊料拾錢

菊判頗美本
正價拾圓
送正菊料拾錢

菊判美本函
正價拾圓
送正菊料拾錢

少年史談

著新先象義邊池 師講學大都京

少年青年修養の好伴侶

第一編

宰府の飛梅 (晋公の事蹟)
加賀の老松 (前田松雲事蹟)
二天一流 (宮本武藏事蹟)

第二編

劍太刀 (天伴氏の事蹟)
悲雨の金崎 (恒良親王事蹟)
落花の芳野 (楠正行公事蹟)

第三編

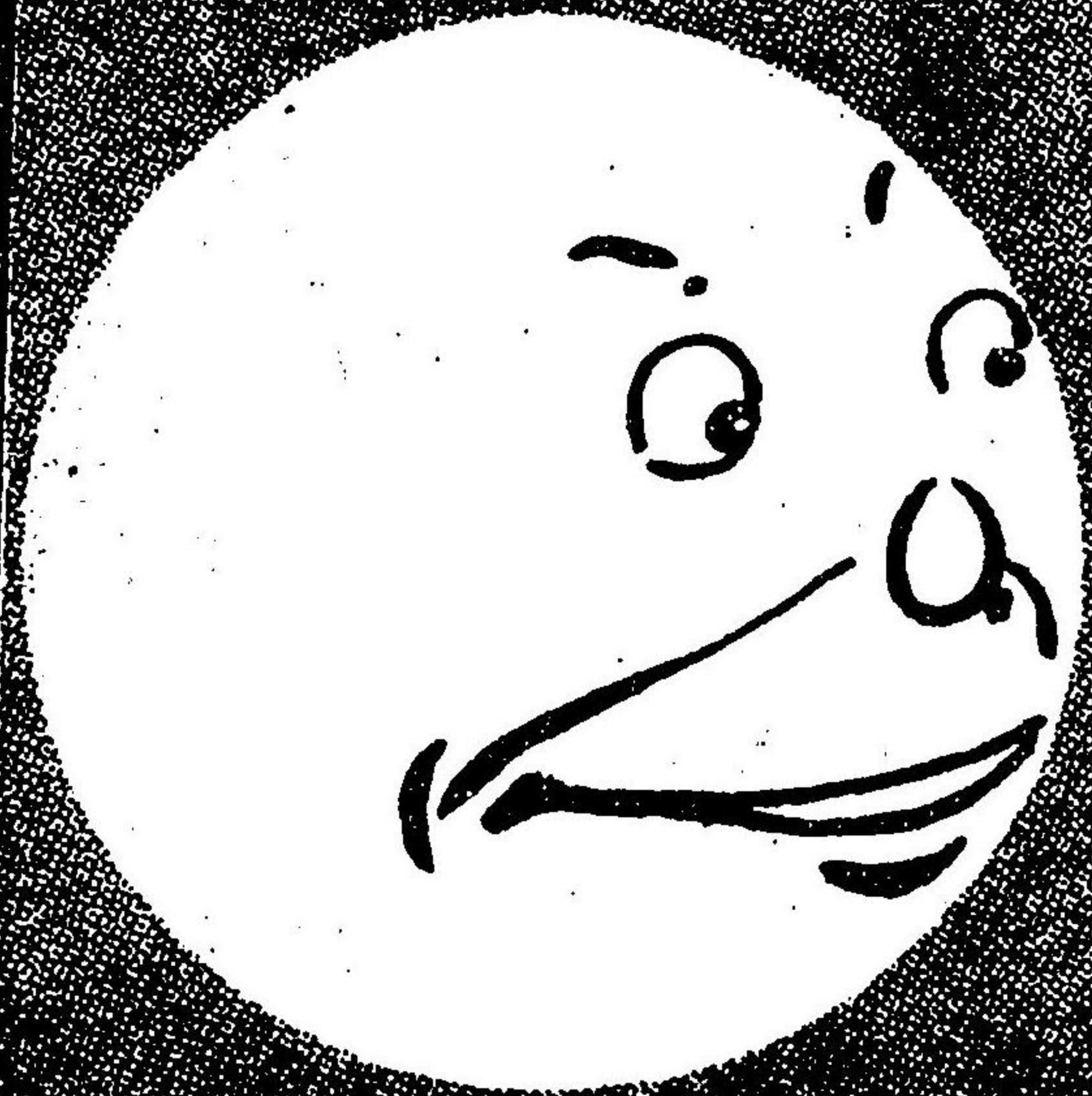
神の御聲 (和氣清麻呂事蹟)
智慧の光 (松平伊豆守事蹟)
義勇の譽 (大石主税事蹟)

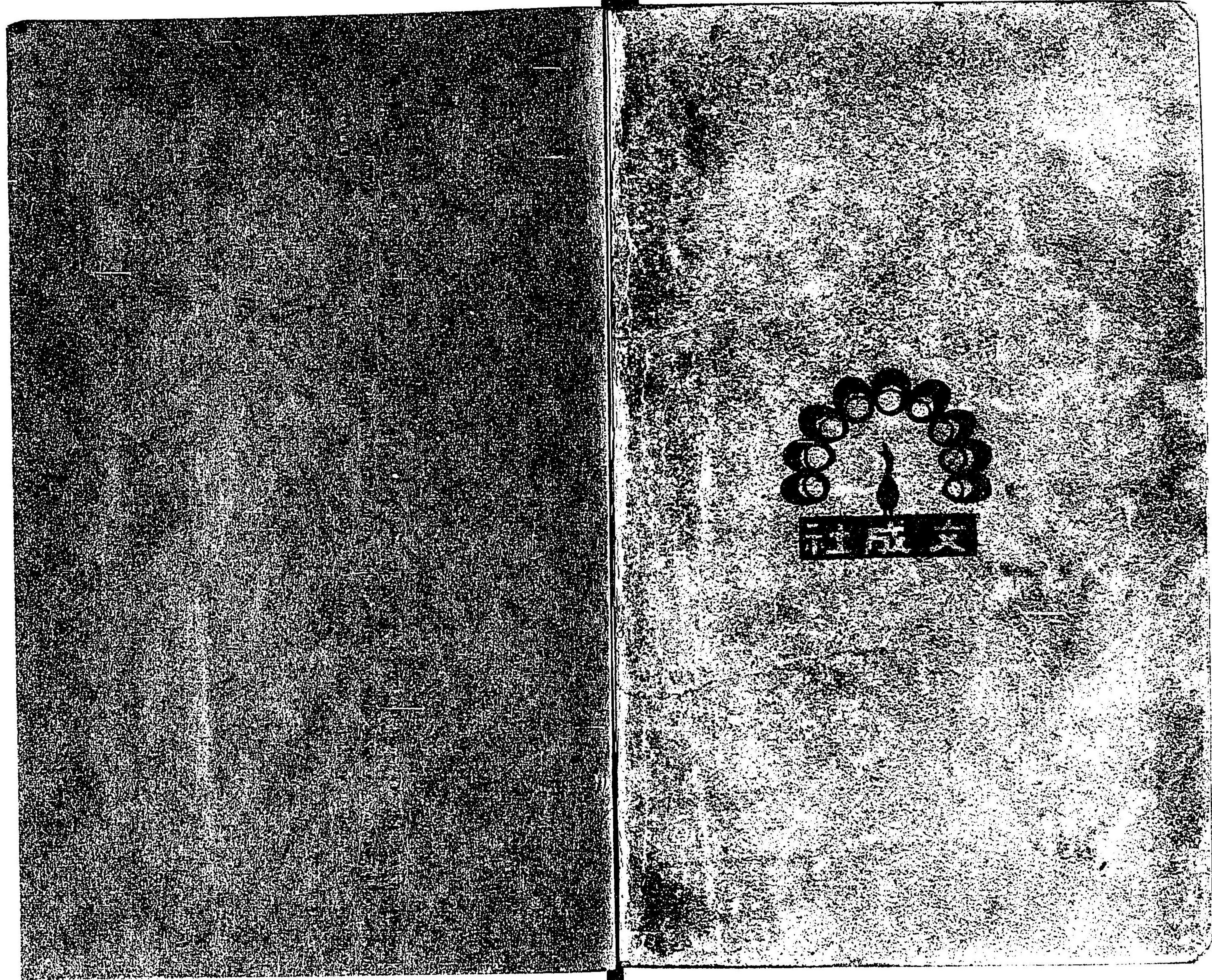
全十二冊 以下毎月續刊

宮川春汀挿畫 濱田如洗挿畫 中川洗巖挿畫

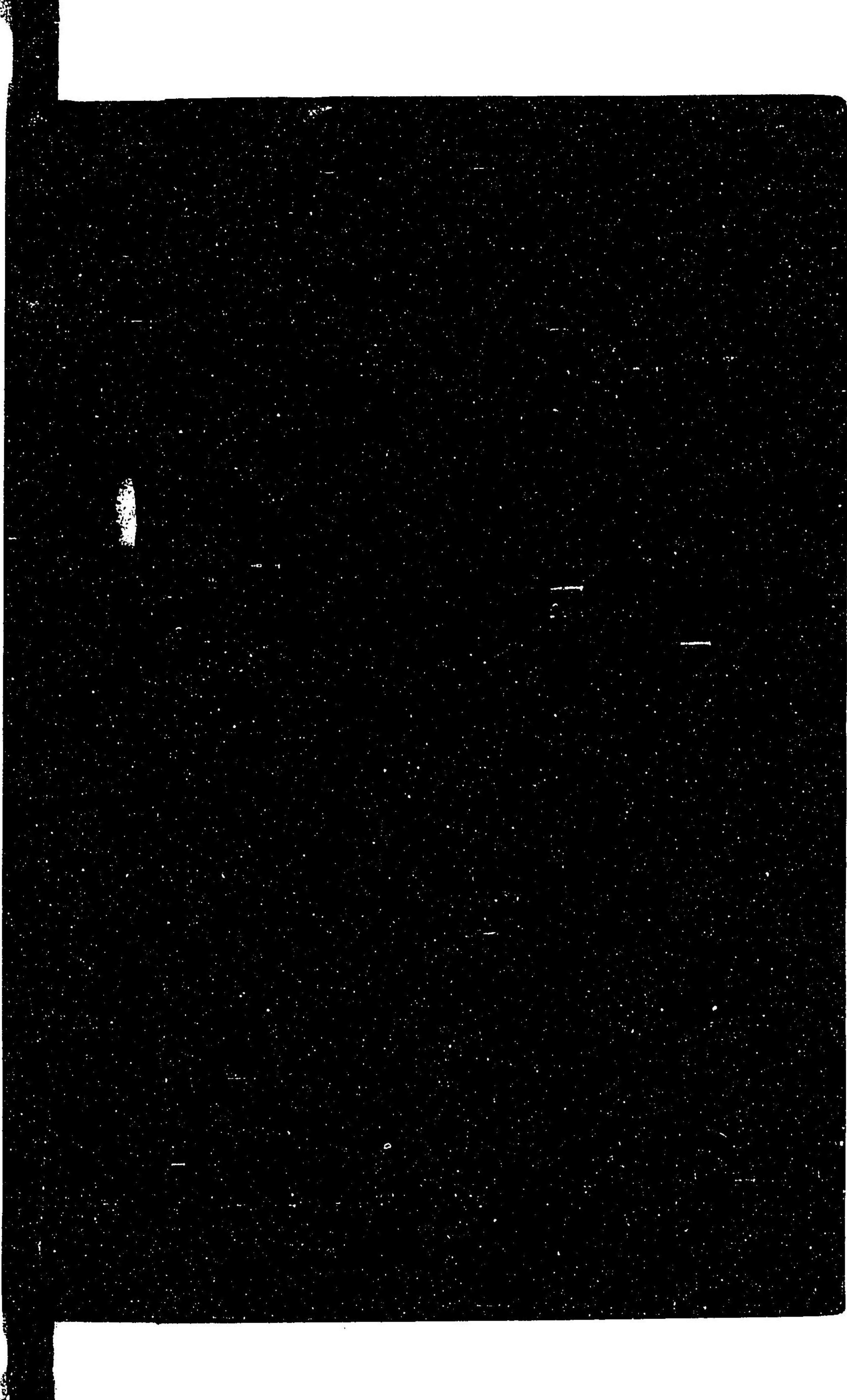
菊判紙精良每冊二百三十三頁頗美本
各冊正金貳拾錢 送各料四錢

29
413





29
413



005095-000-5

29-413

名士の片影

毛内 牛空/著

M45

ACE-1896

